

越喜来湾と吉浜湾 (GoogleMap)



宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長

ひらかわ あらた
平川 新

未来への航路

越喜来湾で
津波にあう

ビスカイノの船が太船渡湾を出て越喜来湾(大船渡市)に入ったのは、1611年12月2日(慶長18年10月28日)のことです。この越喜来湾でビスカイノ一行は津波に遭遇しました。慶長奥州津波です。

この津波は、2011年の東日本大震災からちょうど400年前の出来事でした。慶長奥州津波を引き起こした地震は、これまでの研究によるとマグニチュード8.4から8.7の規模だと推定されています。かなり大きな地震です。ビスカイノによると1ピカ(389坪)以上の津波だったということです。

これまでビスカイノが訪れた浜では、一行

が到着すると村の人たちがめずらしがって見物に来ていました。ところが越喜来湾の浜に近づくと、村の人たちがこぞって山のほうに逃げていったそうです。ビスカイノは自分たちを恐れて逃げているのかと思って、待てえ！と声をかけました。しかし、それは海がせりあがってきたからでした。津波から逃げていたのです。

海は3回隆起して村の家々や米倉、ワラの山などを押し流していききました。多くの人が

②7 ビスカイノ、

慶長津波に襲われる

2隻が波にのまれて沈没してしまいました。

もてなされた

ビスカイノ

津波が収まったあと、難を逃れたビスカイノは越喜来湾の浜に上陸しました。ここでは被害を免れた家を迎えられていました。不思議なのは「もてなしをうけた」とあることです。津波被害をうけた村で「もてなし」というのは、どういうことでしょうか。

これについては東北大学の蝦名裕一さんの見解があります『慶長奥州地震と復興』(慶山房)。リアス式海岸は居住地に高低差がありますが、肝入や網元など地域の有力者の家は多くが高台にありました。津波に襲われた越喜来でも、高台にある有力者の家は無事だったのではないかと

いうことです。ビスカイノが港灣調査を実施するにあたり、藩主伊達政宗は沿岸の村々に調査隊を丁寧

にのみこまれそうになりました。ビスカイノの船は大丈夫でした。が、同行していた僚船

ためビスカイノ一行は十分な接遇をうけています。

東日本大震災のさいにも根白は、集落の津波被害がほとんどありませんでした。隣の吉浜は明治29年(1896年)の三陸大津波のさい、200

人を超える被害者を出したことから高台に移転を推進し、昭和8年(1933年)大津波での死者は17人にとどまっています。東日本大震災の犠牲者も1人でした。人工的に高台に居住地をつくることの重要性がわかります。

その後、ビスカイノ一行は根白から引き返して今泉(陸前高田市)に立ち寄りしました。今泉では50人以上が溺死したとあります。ビスカイノの探検記は、1611年の慶長奥州津波の実態を伝える貴重な歴史記録にもなっています。

翌日、越喜来を出発した一行は吉浜湾の根白に至りました。ここは集落が、もともと高台にあったため被害をうけていませんでした。崖の上の集落が功を奏したのです。その



ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。館館長に就任した。

東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。



海岸の崖の上に集落がある根白 (GoogleEarth)